

# 水のネットワーク

## 20mの水底が見える

支笏湖はこの公園のひとつの中心である。日本の湖沼の中で、トップレベルの透明度を誇る湖は、湖岸を森に囲まれ、濃紺の水を湛えて訪れる人を魅了している。

支笏湖の水がきれいなのは、水中のプランクトンが少なく、また湖岸を自然性の高い森林が囲み、水が濁る原因となる土砂の流入や落下が少ないからである。透明度は1960年代の平均で15～25m、近年はやや下がり、平

均15～20mで推移しているが、平成14年(2002)5月には、1カ所の測点で30.7mの記録がある。そのため、日本では数少ない淡水ダイビングスポットの一つとなっている。「支笏湖ブルー」の水質を守るため、支笏湖温泉地区では、宿泊施設などからの排水を湖の系外へ放流する公共下水道が整備されている。



原生林に囲まれたオコタンベ湖

ふきだし公園の湧水



**羊蹄山の湧き水** すき間の多い溶岩などが積み重なっている火山は、雨や雪が地中にしみこみやすく、それが地下水となって山麓で湧き出す。羊蹄山の山麓には10カ所以上の湧水が知られているが、中でも北東山麓にある「羊蹄のふきだし湧水」は、湧水量1日8万トンに達するといわれ、日本の名水100選にも選ばれている。長い年月を地下水として流れ、いろいろな成分がとけ込んでいる湧水は、良質のミネラルウォーターである。遠くから容器を持って汲みに来る人も多い。



支笏湖水中散策



支笏湖のヒメマス

### 最北の不凍湖

支笏湖の水深は深く、最深363m、平均でも265mあり、ともに日本の湖沼では秋田県の田沢湖に次ぐ。深いため水量が多く、日本最大の琵琶湖(平均水深41.2m)と比べ、面積では約12%だが水量は約75%もある(水量も日本第2位)。対流のため表層の水温が下がりにくく、通常は真冬でも全面結氷しない。日本最北の不凍湖である。

### ヒメマスの移入と増殖

ヒメマスはベニザケの陸封型で、北海道東部の阿寒湖とチミケップ湖が原産である。支笏湖には明治27年(1894)に阿寒湖から移入され、養殖に成功して、洞爺湖や十和田湖など、北海道や本州の多くの湖沼にも移殖された。なお、第2次大戦前には、魚体が小型化したため、千島の択捉島からベニザケの受精卵を移殖したこともある。釣りが解禁になる夏季には、湖面は多くの釣り人でにぎわう。

### Column

#### 支笏湖から千歳川とウトナイ湖を結ぶ水の流れ

支笏湖から流出する唯一の河川千歳川は、千歳市内から北に流れて石狩川に合流し、日本海に注ぐ。上流部は森林に囲まれて澄んだ流れがあり、サケが遡上してくる。ここにある農林水産省のサケマス孵化場では、水車を利用してサケを捕獲する「インディアン水車」がいまも使われている。

かつて太平洋に注いでいた石狩川は、4万年前の支笏火山の大噴火の際、火砕流によってせき止められ、北に流路を転じたと考えられている。

支笏カルデラ東部の山麓一帯は湧水地帯となっていて、そこを水源とする美々川が南に、ウトナイ湖を経て太平洋に注いでいる。



千歳内別湧水

